

## 2018年11月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

500 hPa 高度をみると、スカンディナ비아半島付近、千島近海及びアラスカ周辺で正偏差、北米東部、北大西洋中緯度帯及び西シベリア付近で負偏差となった。200 hPa 風速をみると、亜熱帯ジェット気流は、アフリカ～ユーラシア大陸南部では平年と比べて南寄り流れた。日本付近の偏西風は南北に分流し、本州付近では平年よりも弱かった。海面気圧をみると、スカンディナ비아半島付近、千島近海及びカナダ北部で正偏差、北大西洋中緯度帯及び西シベリア付近で負偏差となった。850 hPa 気温をみると、スカンディナ비아半島付近及びアラスカ周辺で高温偏差、北米東部及び西シベリア付近で低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、ニューギニア島の東、北太平洋中部の北緯10度帯で活発、インド洋、南シナ海～フィリピンの東海上、北大西洋熱帯域の中・東部で不活発となった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、インド洋から太平洋を経由して大西洋に至るまで大きな振幅で東進した。対流圏上層では、アフリカ東部～インドネシア付近で南北半球対の低気圧性循環偏差となった。北太平洋中部の熱帯域～北米、及び北大西洋熱帯域から北東向きにそれぞれ波列パターンが見られた。対流圏下層では、フィリピン付近、北大西洋熱帯域で高気圧性循環偏差、北太平洋熱帯域の広い範囲で低気圧性循環偏差となった。海面気圧は、赤道域では、インド洋～太平洋西部で正偏

差、太平洋中・東部、大西洋で負偏差となった。南方振動指数は+0.1だった。

### 世界の天候

2018年11月の世界の月平均気温偏差は+0.31°C（速報値）で、1891年の統計開始以降2番目に高い値となった。11月の世界の平均気温は上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.72°C/100年（速報値）である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

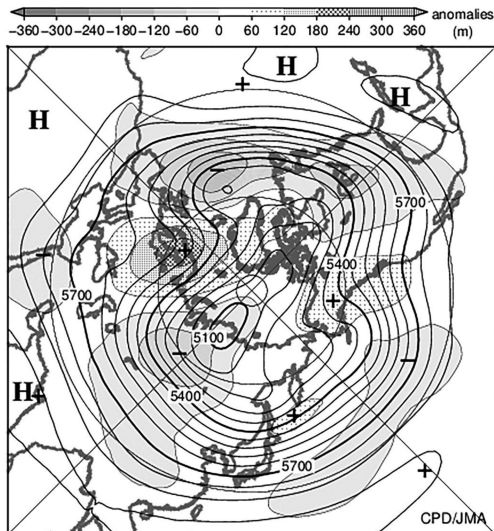
- 東南アジア北西部、スカンディナ비아半島北部、中米東部及びその周辺、オーストラリア北東部で異常高温となった。
- 中央アジア東部及びその周辺、カナダ南東部～メキシコ北東部で異常低温となった。
- サウジアラビア北部～エジプト北西部、ブラジル北部～アルゼンチン南部で異常多雨となった。
- 北日本～西日本、ヨーロッパ中部及びその周辺で異常少雨となった。

（気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課）

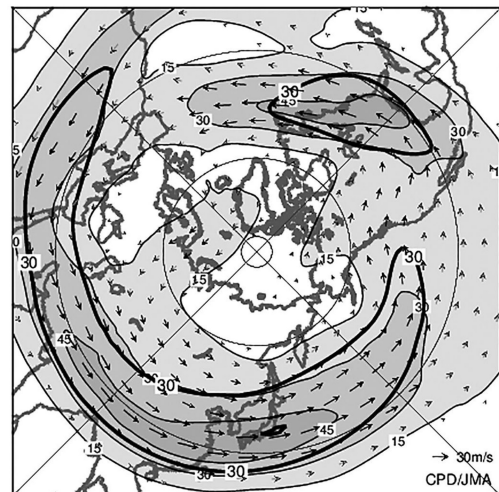
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ

「気候系監視速報」をご覧ください。

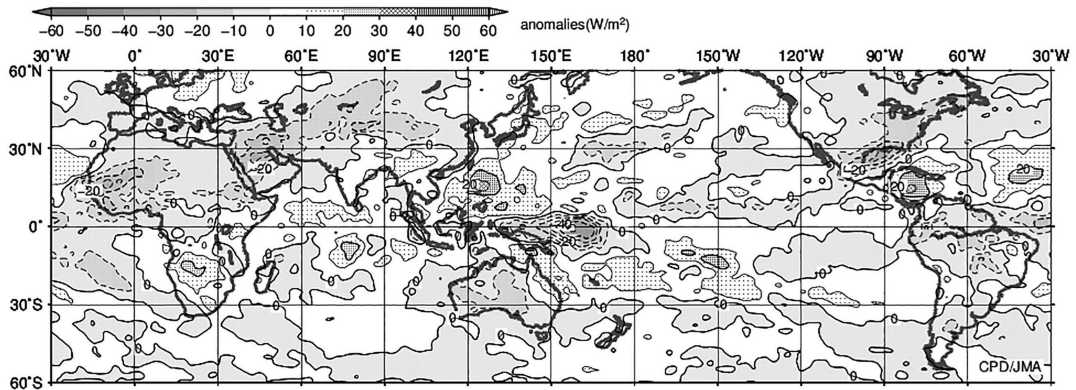
<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



2018年11月の北半球月平均500 hPa 高度及び平年偏差  
等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1981～2010年の平均値。

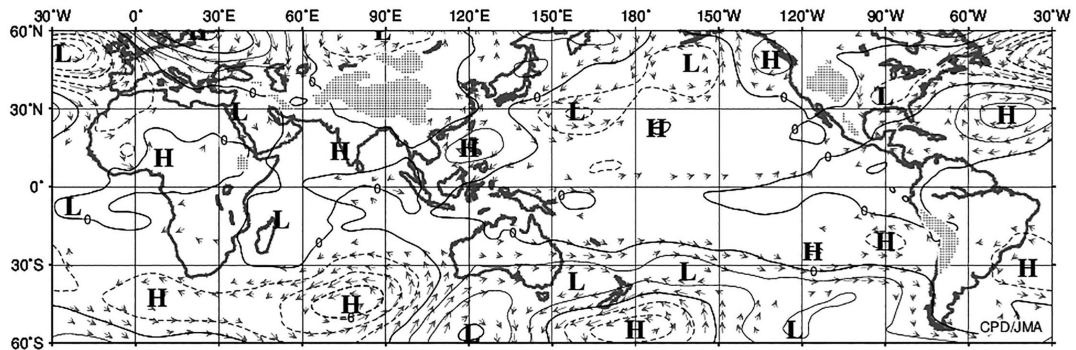


2018年11月の北半球月平均200 hPa 風速及び風ベクトル  
等値線間隔は15 m/s。太実線は平年の風速で等値線間隔は30 m/s。平年値は1981～2010年の平均値。



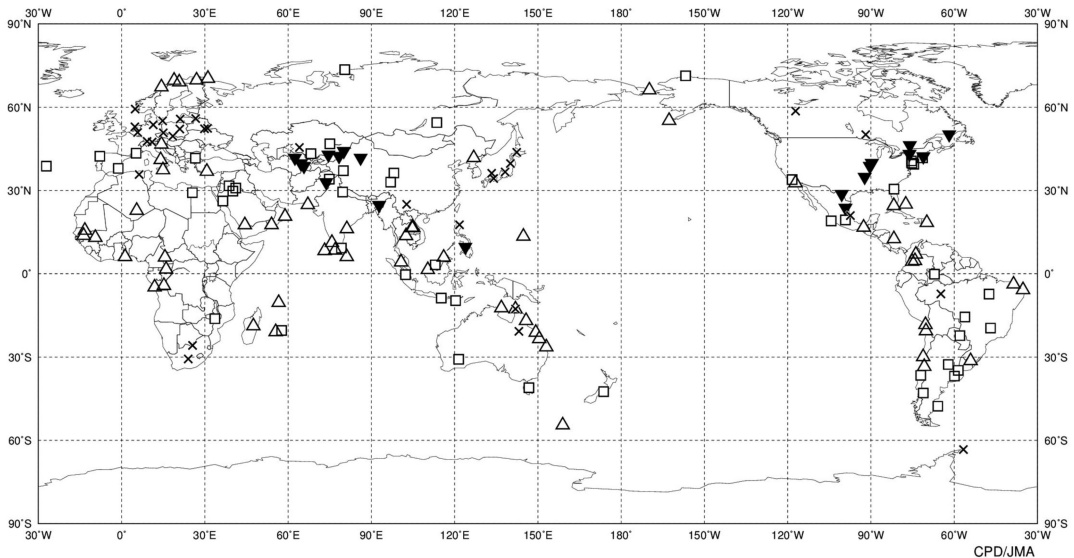
2018年11月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は10 W/m<sup>2</sup>で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1981~2010年の平均値。



2018年11月の月平均 850 hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は  $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1981~2010年の平均値。



2018年11月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨

異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。